

愛珠

想い出ずるままに (九)



中 村 道 子

一 大阪大空襲の前後 その二

四月二十九日の天長節には、遊園の大神宮の大前で、職員一同慶賀の最敬礼をし、あわせて武運長久を祈念した。今日は例年と違い、幼児の姿のない祝日で、淋しく思ったが、殿村先生からの戦災見舞の葉書をいただいで、懐しくて嬉しかった。先生は最近郷里の秋田へ、疎開せられていたのである。

空襲以来、私が幼稚園に宿直する時には、摂養室を使った。半間の押入には、職員用の寝具一流れと、毛布も用意していたから、少しも不自由なく過ごすことができたし、また正門脇にある使宿直室は、昼間は付添人の待合室であるから畳敷にし、広い押入には寝具も揃え、小使さんたちの私物も置いていて、昔から

ここを宿直室といていた。

空襲で罹災した汎愛と久宝両園の、連絡事務所を愛珠にするよう命ぜられたので、全員が揃った時、広間の畳四畳を応接室に運び、昔から園長室にしていた室に敷いて、私の事務室であった衛生室と兼用の部屋を、二人の先生の事務室に使ってもらうこととした。

そして、この翌々日堺市外の浅香山農事実行組合で、分けてもらった来た甘藷の苗を、手分けして畝全部に植えたが、皆の協力でこれもまた、早く片付き合力の大切なことを見せられた。苦しんでいた苗が全部植え付けられたので嬉しかったが、楽しさの半面いつ来るかわからぬ空襲の不安が、常につきまとい、とくに最近警報の発令が繁くなつて、よけい不安に脅かされていたからであった。

果せるかな、今日警報が発令され、続いて空襲警報の時には、多数の敵機編隊が名古屋方面を襲っていたのである。

このように大阪市へも、また来ることは必定と思ひ、ラジオを聞きながら、職員室の戸棚を整理し、午後早々一纏めにした文献の残りを背負って、今日は一人で豊中へ運搬し、越えて五月十七日には、朝早くから最後の一纏めを持参したので、古文献及び重要書類は、全部疎開させたのである。——自分が男子であれば、車を借りてたくさん積み込むのに、何度も行って山口さんに、迷惑をかけて申訳がなかった。それも途中で長い坂道があるから、疲労の度を考えて、一回分の荷物も少なくなつたから、回数が多くなって美にすまなかつた。——いよいよ、これで全部運んだのだと、ほっと安心した。

「先生!! ちょうど良い時に来とくなかつた。これから川西航空へ行こうと、思っていたところでした。お父さんが徵用で川西へ行きましたやろう、それでお父さんの好きな、ぼた餅を持って行こうと思つて、朝早くからこしらえて、やつとできたんで、これから用意して、行こうと思つてましてん。ちょうどよかつた、先生もお上がり」と、大きい重箱にたくさん並べて入れてあつた。「そやけど、もうちょっとで行き違いになるとこでしたな、よろしおましたな、あんまり甘いことないけど、先生もお上がり!!」といつて、お皿に入れて下さつたけれど、「お父さんより先に、いただくことはできませんわ、時間が遅れるといけないから、貴

女も早く支度をして、いっしょに駅まで出ましよう。その間に、この荷物を倉へ入れて来ますわ」といいながら、裏口から倉へ行き、台所へ帰つて来た時には、食べて帰れと何度もいわれるからいただいたが、こうした材料の不自由な時に、大きい重箱にたくさん作つて、ご主人を悦ばそうと思われるご心情の優しさは、とても暖かく思つた。

「お父さん一人では、食べられへんやろう、どうせお友だちにも上げはるやろうと思つて、たんとこしらえましてん」

「そうでしたか、お父さんは喜びはりますで!! ぼた餅だけやなし、貴女の優しい心も嬉しおますで——」

私は心暖かいご心情に感じた。お母さんのこの言葉は、側で聞いている二人の子どもらに、人の心遣いということ、不言のうち教えられたことだろうと思つた。

今日で疎開する物は全部運んだが、幼稚園の砂場に埋めた一つの大切な物がある。

それは、十二代衆[?] 吉備門の作になる茶器で、運搬の途中で破損してはと恐れたから、木箱の中へ何重にも包み、トタンの湯沸しに入れて蓋を堅く括りつけ、砂場を深く掘つて、夜中に埋めたから、私が爆死しても、これを見ていた大空の星は、正直なだけかに、このことを気付かせてくれるだろう。茶器は愛珠から失うことはない、私は信じたのである。

古文献全部を山口邸に運び、気分がほつとしていた今日、午前

八時半に警戒警報を聞き、次いで九時半に空襲警報が発令され、第二回目に当たる大空襲が行なわれた。

創立記念日に当たるといふのに——本日の目標は大阪市の中央と東北部で、敵機の編隊は四百機、愛珠の附近には焼夷弾が多数落下したが、本園には異状がなかった。——やれやれと思つてゐる時、園の西方が非常に騒がしいから、思わず内北浜にあつた非常口から、御堂筋を見ると、日本生命保険会社本館前には、建物に沿つて火が並んで見えたから、先刻の敵機が落とした物と直ぐわかつた。そして広い御堂筋の中程にも、点々と燃えていた。

焼夷弾が多数落下されたことは確実だから、急いで園内に帰り、あちこちを走り回つて入念に調べたが、異状がないので安心して、ちよつと正門前に来ていたから、西方の内藤会長宅の方を見て無事であつたからよかつたが、反対を見た時びっくりした。それは太い火柱が、家の中から往来へ噴き出しているようであつたから、よく見ると、どうも集英幼稚園であるから実に驚いた。

あの大きい正門も焼け、左右の柱が燃えて倒れたとすれば、あの火柱は門の燃える火であつたろう。日直の先生が無事であるように祈りつつ、再び園内を見回したが、どこも燻つていなくなつたから安心した。その頃敵機は遠く東方へ去つて、警報は解除されていたので、神宮の大前で一人日本の武運長久を祈念した。幸に今回も難を逃れたから、深く感謝したのである。

午後三時頃奥井のおばさんの顔が見えたから、「どうしたの

？」と尋ねたら、涙を目に溜めて「先生!! 今日、家も焼けました」と、いうと溜っていた涙が零れた。

そして罹災の有様を種々話して、「仕方がないから、皆江州へ帰ることにしましたので、退職のお願いに來ました」といったから、私は驚くと共に、しみじみ可哀相になつて泣けてきた。「今日は人の身明日は我が身で、幼稚園も何時焼けるかわからないけど、おばさんとこだけと違ふから、元氣を出してがんばつてちょうだい、種々お世話になりましたな!! 貴女には随分苦勞をかけたわ!! おばさんが毎日使つていた台所の物は、何でも上げますから持つて行つてちょうだい、世帯道具は今夜から要るやろうから、よう考へて要るだけ持つて行つてちょうだい、無情な愛珠の忘れな草やなあ!!」といつて泣き笑いし、「よう働いてもらつたから、こんな時でなかつたら、送別会もするのにな、それができなくて可哀相になあ!! 退職届や役所の手続きは、間違いないくちやんとするから安心してちょうだい。家族の人に怪我がなくてなによりよかつたわ——」と勞わつてゐる頃、空襲の後に起こる例の真黒い油のような雨が、しとしと降つて来て周囲はだんだん暗く、まだ五時にもなつていないのに、四尺程も離れると、も早見えないので、電燈をつけるとよくお互いの顔が見えたが、こんな空襲の時でも送電せられたことは幸いであつた。

奥井さんと暗い電燈の下で挨拶をして別れたが、広瀬さんの顔が見えなかつたので、どうしたのかと案じた。日本最初の公立幼

稚園である愛珠のめでたい開園記念日であるというのに、日頃真心でよく働いて、種々苦勞してもらった奥井のおばさんが罹災し、案じていた広瀬さんも罹災して、その上足を傷めたので、全く愛珠にとっては災難であった。やむを得ないから久宝と汎愛の二人の先生に、交替で毎日来てもらうことに頼み、私と三人でがんばることとした。

六月五日は三回目の空襲にて、市の北部と神戸であって本園は無事であった。しかし午前八時から午後五時まで継続して視学会が開かれ、皆の顔が緊張していたから、種々憶測して案じた。

——翌日もまた昨日同様だったので一層案じた。一方、午後一時から三時まで独立幼稚園の園長会が開かれたが、罹災した園長等は、皆気が楽だろうと瞬間羨ましく思った。

忘れもしない六月七日、前日に引続き本日も視学会が開かれたが、午前十時に警戒警報とほとんど同時に空襲警報に移り、先日と同様市内中央で、前回の残りの部分らしく、本園区内を襲撃した。今日で四回目だ、爆弾の音も聞こえる!! 視学会は瞬間に解散され、市役所へ帰られたらしい。ふと大屋根を見ると県係長が見え、四方を見下ろしておられる。塚本・谷山・浅岡の各視学は、浮世小路から緒方病院の裏側へ行かれたらしく、隣組の消火活動の助勢らしい。汎愛、久宝の先生二人は飛んで来る火の粉を消し、私は納屋の屋根にある菊や朝顔を栽培していた三坪ばかりの植木棚に登って、盛んに散って来る火の粉を消したり、また園

内の各所を走り回って火の粉を消し、姿も構わず大きな声を出し、他の人が見たら、阿修羅の形相であつたらうと思つた。

今日はこの附近が最も強烈で、焼夷弾が園の周囲に三発落下し、一発は今燃えている高麗橋三丁目で、一角は全焼して緒方病院裏まで延焼したから、本園への延焼を恐れたが、町会の統制ある防火活動によって、向いの一棟への延焼をくい止めたから園は難を逃がれた。消火に行かれた三視学の協力も大きかつたと思つた。警報解除後、摂養室にて休憩をとつてもらふよう願つたが、役所へそのまま帰られた方もあつて、私が摂養室へ行つた時には、二人しかおられなくて失望した。持つて行つたお茶と、お菓子代りに馬鈴薯のゆでたのを召し上がつてもらふよういつた時、この町会をよく統制がとれていると感心せられた——全くお手柄だつたと感謝した。その時、隣の日商の小使さんが「校長はん!! ちよつと見に来とくなされ」と、私をぐんぐん引張つて細合ほそあひから会社の非常通路に連れて行かれ、ちよつと遊戯室と会社の本館との間、二間幅の程に、長さ一尺程の丸い枕のような物が、プロペラを付けたまま落ちていたから、爆弾と一目でわかつた。

小使さんが一人附いて此方を見て笑っているから、「ここへ爆弾が落ちましたか」と走りよつた。「校長はん不発でよろしおましたな」「発火したら、幼稚園もうちも燃えてえらいことでは」「ふうんよろしおましたなア」思わず私は声を出した。嬉しかつたのである。「さつき警察へ知らせたから、取りに来るまで

待ってますねん」「不発でほんまによろしおましたな!! よかった、よかった、一人で番してもろうて悪いけど、うちも一人やから堪忍してちょうだいや!!」といって、園へ帰って来た。

六月十三日には、教育事務局が、同じ井池筋にある芦池女子商業学校へ移転したから、先日の視学会はこのためだったのかと、一人で会得した。そしてこの翌々日午前九時から五回目に当たる三百機の大編隊の空襲が行なわれたが、幸い無事であった。

この三十日午前八時半頃船場署員が来園し、最も恐れていた木造建築の疎開通達をした。——理由は遊戯室の西隣にある井池筋を隔てた三菱信託を準備するため、三十メートル以内の木造建築を疎開することであった。私は理由を聞いて得心し、三十メートル以外は許可するといったから、残置箇所を定めて、教育局へ行つて施設課長に話している時、たまたま市川教育部長が来られ、いっしょに話を聞いておられたが「中村さんもう受けなさい。それで建築に関するものは全部貴女に任せるから——それから転動は愛珠だけ認可しますから、だれでも良いと思う人を呼んで来なさい」といって下さったが、来る人は無かった。本人が希望しても両親は許さなかつたらしい。

翌日、疎開建築物と残存箇所を、警防団と警察へ行つて、強調依頼して許可を受けたが、疎開箇所中の備品は全部は愛日校に預けることを命ぜられたから、木内校長に依頼して、借用室の指示を受け、運搬に要する人手は、船場高女に受くべく亀島校長に依

頼し、快諾を得た。女学生たちは小さい身柄にも似合わず、よく働いて下さったが、空襲があると中止するので、なかなかほかどらなかつた。しかし運搬に要するリヤカーは、中大江小学校の方年校長によって、借りてもらうことができ、大変助かつて嬉しかつた。

ちょうど女子体育研究会に一しょに行っていた、堀尾静さんのご主人が、市役所へ来たからとて愛珠へ寄られた時、私のこの姿を見て「三月の空襲で住友の工場が焼けたので、動員に行っていた生徒等の手空きの子を、動員して手伝いに来てもらって上げますわ、可哀相で見られてられませんわ」と同情して下さったから「それでは無理のないようにお手伝いを願います」と、親切なお言葉に嬉しく思った。堀尾校長はその頃都島区にある春日出小学校の校長で、高等科の生徒が動員されていたのである。

私が遠慮なく困っていたことなどを話すと、黙って聴いておられた校長先生は、翌日には早速ご自身と同校の職員方三人が来られ、直ぐラジオの修理や、倉庫の電気修理をして下さったので大層助かった。「中村さん一人では可哀相過ぎる!! 明日から動員の生徒等が来るから頼んで手伝ってもらいなさいや」と親切にいつて下さってほんとに嬉しかつた。

翌日には堀尾校長を始め、塩川・西野両訓導が男児を八、九人引率して来園せられたから、実に嬉しく、そのご親切に感激した。そして早速藤棚を解いてもらうこととした。藤はなくなつて

いたが柵は未だ残っていて、気になっていたが今日全部取れたので安心した。また、ピアノは明治十六年神戸のオランダ領事館から買い、その頃大阪市内で最初の物であったし、他の一台は明治末期に区内有志の人が寄贈した物であったから、広間の畳を除いてそこへ入れてもらい、余裕のある限りオルガンも全部入れた。

——教育局は疎開せよといっていたが、故意に預けなかったのである。この日稲葉園長時代の石坂保母が来園せられ、園内の彼処此処を見て、変り果てた姿に感慨無量な面持であった。

七月二十日には園内の疎開箇所の話や電燈籠を取外し、残存箇所へ取付けの件で、施設課長の了解を役所で受けて来ると、待っていたように電気工事も始められたが、二十四日の終日空襲で工事も疎開運搬も全部中止された。また三十日には午前五時から、ひっきりなしに波状空襲を受け、作業は全くできず、気分がいらいらして非常に疲れを覚えた。そして八月四日には疎開の通牒と共に、正門に白線で「疎」と書かれたので残念であったが、やむを得ないと得心したのである。

電気工事は次々進み、正門の電燈は北浜の裏門に切替えられた。また遊園の上に電線の掛ることを恐れ、摂養室への電線は保育室の長い廊下を迂回して架けてもらったことは、せめてもの喜びであった。電気工事が終わると大阪府緊急工作課から、取毀日程の予告のため、二名係員が来園し、八月八日から十日までの間とわかったが、もう覚悟をしていたから驚かなかった。二人の中

の年老いた人は、如何にも気の毒そうに申渡したのであった。この間一方では何も知らず春日出校の女兒は、四時まで机や椅子等を運搬して下さったから、例によって下手な煮付けで労をねぎらって別れた。

——以前高女生に疎開物の運搬を依頼した時、皆十五、六歳の食べ盛りの少女だった故、時々何かしゃぶりながら働いていたから、尋ねると豆の粉であるといったので、可哀相に思い、食糧入手のため業者と折衝して、やっと一吠まきの馬鈴薯と同量の玉葱を分けてもらい、オリーフ油が衛生室に半ポンド以上あったことを思い出し、玉葱を油でいため塩味にし、薯をゆでていっしょにすすめたら、非常に喜んで食べてもらったから、その後仕事の後では、いつも食べてもらうこととして、心から感謝していたのである。

八月六日も春日出校の学生六、七人に、黒田訓導の指揮で多数運搬してもらったため、非常に片付き、一方、市の営繕課と配電会社から係員が各々一名来園し、電気工事の検査をしてもらい、異状無しと許可を受けた。——いよいよ八日にはこの遊戯室も、これに連る各室も毀たれて、由緒ある愛珠の園形が、永久に変わるのだと思うと、家に言葉があればさぞ歎けよう。昔創設に尽瘁した先覚者たちも、悲しい今回の戦争に、無念の思いを込めておられるだろう。この思いは愛珠を知っている人は、だれも同じだろうと一人想っていた。

八月八日の朝が来た。気のせいか今朝は空もくもっている。そ

のうち糸のような雨が降って来た。もつと強く降れ降れ!! 八時半頃手伝いさんが来て「園舎の解体を今日するはずでしたが、天気が悪いから一両日延ばさせてもらいますわ」といったから、「そうですか? 向かいの借家が解体せられてから、幼稚園を解体してもらいますわ。向かいより先に幼稚園を解体せんといて頂戴や」ときっぱりいった。向かいの家は代々発展しては、大きい家に転居しているそうで、縁起のよい家とだれもいっているそうだ。この前爆弾が落ちた時も、あの一棟で火事がくい止まったから縁起を思っただけだった。「先生そんなことをいいはっても、プーが来たなら一発で無いようになりませ」。「プーが来て焼けたらそれまでで、人の手で毀つんなら遅い方がよろしいが——」今日は雨やさかいとにかく延ばしますわ」と笑いながら帰って行った。私はそのまま直ぐ役所へ行って、電気工事や諸道具の陳開を完了したことを、報告して帰ると、堀尾校長は一人の訓導と共に、花壇の井戸を予定通りに、柱を立て車もつけ井戸側も填めて、水を汲み易くして下さったから、早速何度も汲んで水を替えた。振釣瓶の比ではなかった。

暫く警報を聞かなかったが、今日十四日午前十時に空襲を受け、続いて午後一時に再度空襲され、大編隊で大阪東部方面へ投弾せられ、爆音が頻々と聞こえたが、その中強い爆風のために、摂養室の大きな四枚障子が揺いだかと思うと、その中三枚が紙を散らすように前栽へ飛び散った。——今日は自分の生命の最後だ

と思ひ、私が掘った壕の中にはいった、私の心は静かであった。そのうち警報は解除されたが、午前も午後も皆大阪東部に集中していたのに気付き、何処だったろうと思っていると、砲兵工廠への爆撃と報道され、なお明日正午には重大放送があることを、伝えて来たから、それからそれへと種々案じ、そして翌正午には間違ひなくラジオを開けて待った。重大放送の予告に次いで、下の御声で終戦の詔勅が下された。天皇陛下の御声を、ラジオによって初めて拝聴し、拝聴しているうちに、心身共に緊張して、そのうちに涙が止め度なく流れ、泣けて泣けて仕方がない。これは日本人としてだれも同じだろうと思った。

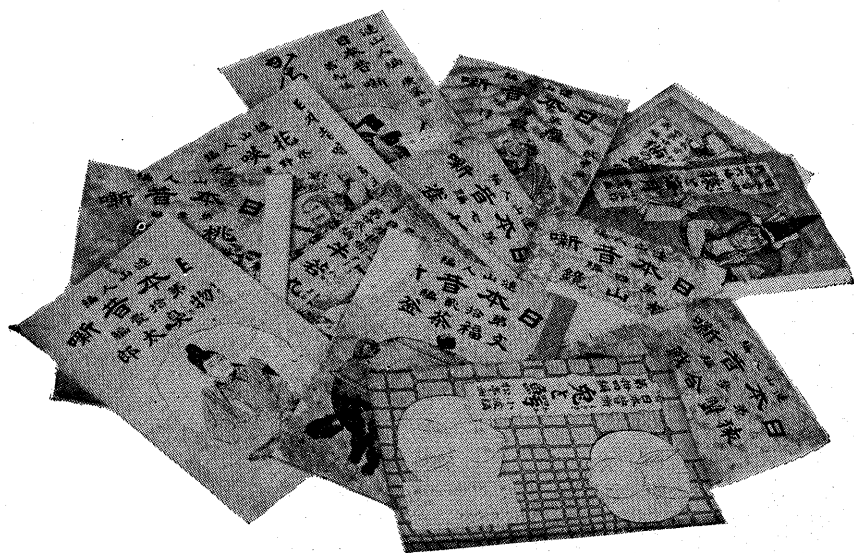
さて、終戦と共に陳開は中止となり、周囲の状態は、がらりと回転したような感じがしたが、涙は止まらなかった。私は流れる涙を拭きもせず、正門前に立ち、白練で「疎」と書かれた字を消しにかかった。消しながら、「今日此処へ来るまでに、何人倒れたか、何人沈んだか、皆の犠牲の影にこの門は立ちつくし、園舎は残存したのである。殊に爆弾は不発に終り、焼夷弾もまた避けて行った。これが愛珠の持つ運命だったか。——明治初年の幼児教育への希望を、残せとの意図か——自分にはそれはわからないが、今後もこの歩みを続けて行こう、根限り整理して残して行こう、不足の箇所は誠ある人が、また補足して下さるであらう。」

「疎」を全く消して園内に帰り、しみじみ苦悶の跡を顧みながら、警報の無い静かな夜を、疲れに誘われてぐっすり眠った。

愛珠・写真集



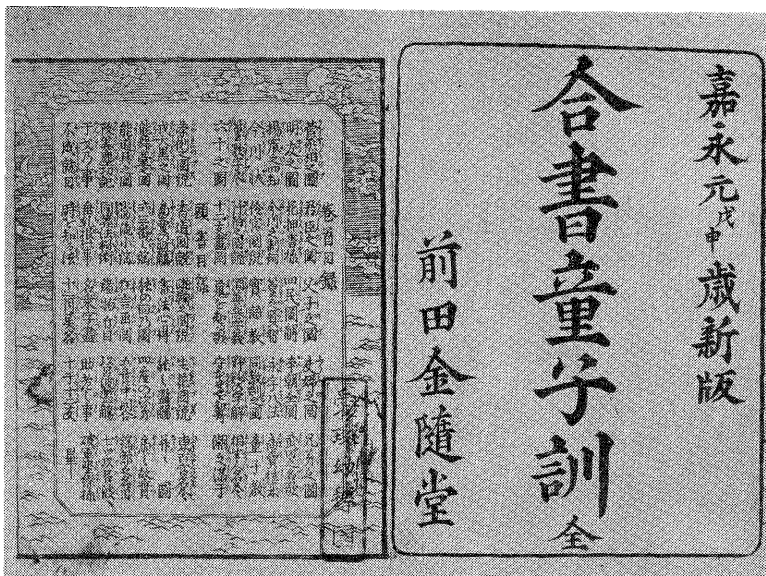
日本お伽噺 小波作



日本昔噺 連山人編



綿繪修身談



合書童子訓



合書童子訓



幼稚の曲及び手まり歌